

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884001

研究課題名(和文)現代の聖人：ロシア正教会における列聖と聖人崇拜

研究課題名(英文) Saints in Modern Times: Canonization and Veneration of Saints in the Russian Orthodox Church

研究代表者

高橋 沙奈美 (TAKAHASHI, Sanami)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・助教

研究者番号：50724465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、現在のロシア社会において、大きな社会的影響力をもっている聖人について、その崇敬の在り方と列聖のプロセスを明らかにすることを目指した。具体的には、ペテルブルグの聖クセーニヤとモスクワの聖マトローナ、そしてロシア帝国最後の皇帝ニコライ二世一家について調査を行った。聖人崇敬という宗教実践は、キリスト教の教義や教会慣例についての理解をほとんど必要とせず、かつ日常的問題の解決に有効であると信じられており、これらの聖人が慈愛に満ちた賢い老女、信仰と愛にあふれた家族として現代の人々の共感を集めると同時に、古いロシア社会への懐古主義的イメージと結びついていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：My research project aims to analyze the process of canonization and veneration of modern saints, who have a significant social influence on the contemporary Russia.

I picked up as case studies St. Ksenia of St. Petersburg, St. Matorona of Moscow and the last Russian emperor Nikolay II and his family.

Believers do not expect to have certain knowledge of the Christian canon and rites, in order to pray to the saints, whose intercessions are to be believed as effective for the resolution of various problems in everyday life. These modern saints are empathetic for the majority of the believers as merciful and wise old women, or pious and harmonious family. At the same time, their images are connected to the nostalgia for the traditional Russian society.

研究分野：地域研究

キーワード：ロシア ロシア正教会 聖人崇敬 宗教社会学

## 1. 研究開始当初の背景

20世紀の列聖と聖人崇拜についての社会学的研究はロシア本国だけではなく、我が国を含めた諸外国でも萌芽の状態にある。

現代の正教信者のマジョリティにとって、聖人崇拜はもっとも重要な宗教実践といっても過言ではない。現代ロシアにおける正教会の影響力や歴史認識を考える時、聖人の列聖崇敬の問題を考慮に入れることが喫緊の課題である。ただし教会が列聖した聖人がすなわち信者の崇敬を集めるわけではない。現在の社会状況の中で、聖人が多数の信者を惹きつけうるか否かは、マスメディアによる影響が大きい。すなわち、聖人研究のためには、ロシア教会という組織のみならず、現代の信者の在り方を複合的に捉える必要があり、聖人研究は、ロシア正教会の20世紀以降の変容を考える上で重要な課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、ロシア正教会の信者にとって最も重要な信仰対象の一つである聖人に着目し、後期社会主義時代からポスト・ソヴィエトの現在に至るまでのロシアにおける聖人列聖のポリティクスと聖人崇拜のプラクティスについて明らかにすることを目指した。

ロシアにおける聖人崇拜は非常にアーカイックで土着的な信仰形態である。聖人崇拜は民衆の自発的な宗教実践として行われてきた一方、正教会はこれを選択的に列聖することで、時代ごとの教会政治に利用してきた。現代の社会状況の中でロシア正教会が列聖によってどのような政治的・経済的利益を享受しようとしているのか、また表面的にはアーカイックに見える聖人崇拜が、ソ連崩壊とポスト近代社会の到来という宗教をめぐる新しい状況の中でいかなる変容を経験しているのかを宗教社会学の視点から明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

本研究では、列聖と聖人崇拜について、ロシア史上著名な人物としてニコライ二世一家と、民衆から輩出された聖人であるサント・ペテルブルグの聖クセーニヤとモスクワの聖マトローナ、という2つのグループに着目し、それぞれについて文献資料の収集と表象読解、フィールドワークを行った。

まず、列聖に関しての教会資料から、正教会におけるそれぞれの聖人の位置づけとメディアを用いた表象戦略を明らかにした。続いて聖人崇拜のプラクティスについて、皇帝一家の終焉の地エカテリンブルグで、また民衆の聖人については、それぞれ St. ペテルブルグとモスクワでアーカイブ調査とフィールドワークを行い崇拜の歴史的起源と

実態について明らかにした。

## 4. 研究成果

のニコライ二世一家の崇敬と列聖については、モスクワおよびエカテリンブルグでフィールドワークおよび資料収集を行った。最後の皇帝一家の列聖については、教会の専門家の中でも賛否両論があったことを明らかにした。列聖に反対した聖職者の多くは、ニコライ二世一家が列聖に足るほど宗教心に篤かったわけでも、信者の模範となるべき生を送ったわけでもなかったことを指摘した。しかし列聖委員会は最終的に、彼らが銃殺にあたって、逃亡や抵抗を試みず、「キリストのように進んで死を受け入れた」ことを評価して、「受難者 Страстотерпцы」として列聖した。これは、亡命ロシア教会が1981年に彼らを「殉教者」として列聖した評価とは異なるものである。

また、彼らに対するロシア本国での崇敬は、1980年代後半にさかのぼることを明らかにした。1918年7月に彼らが銃殺された後、1920年代中ごろまでは、この事件は革命的偉業と捉えられ、喧伝されていたものの、その後、スターリンの支配が確立するに従い、銃殺事件に触れることはタブーとなった。

しかし、1970年代、革命以前のロシアの歴史に対する関心が高まる中で、この事件は一部の人々の関心を再び集め始めた。また、1981年に亡命ロシア教会がツァーリ一家を列聖すると、これに関連する文書がひそかにロシア国内でも流通を始めた。ペレストロイカ末期の1989年、エカテリンブルグで初めてツァーリ一家を記憶する「ミーティング」が持たれたのが、宗教的性格を持った崇敬の始まりである。

こうした崇敬において、ニコライ二世は、「贖罪者ツァーリ」などと位置付けられ、中世的なロシアのツァーリ信仰と結びついた終末論的認識の中で捉えられることも稀ではない。すなわち、最後の皇帝一家崇敬は、歴史認識論にかかわる政治的問題ではなく、教義(ピリーフ)や宗教的实践(プラクティス)といった宗教的側面と結びついた特徴を持っているのである。

また、ニコライ崇敬は、教会組織に属さず、また伝統的宗教実践についての知識をほとんど持たない人々によってはじめられた点を鑑みる時、これが近代社会における宗教の特徴である「脱」組織化・「脱」制度化した宗教実践であるという側面を持っていることは間違いない。同時に組織宗教に基づいた宗教実践としての聖人崇敬の両側面を持ち合わせていることは、この崇敬が列聖に伴って、組織教会の管理下に置かれ、正統なカノンにそぐわない実践者が「異端」として排除されている現状からも明らかである。

一方、については、ペテルブルグの聖クセーニヤを中心に調査と分析を行った。クセーニヤ崇敬は帝政末期にすでに始まっていたのであり、ソ連時代にこの崇敬がどのような形で継承されていたのかを明らかにすることが重要な課題であった。

クセーニヤの礼拝堂は、1940年と1961年の二度にわたって閉鎖されていた。最初の閉鎖は、1920-30年代の反宗教政策の延長線上にあるもので、宗教的組織の殲滅をはかる地方行政によって強制的に行われたものであった。宗教弾圧を受けて、人々はそれまでのように司祭に祈禱を依頼することができなくなり、クセーニヤに直接「手紙」を書くことに新たな祈りの形を見出した。聖職者も礼拝堂も必要としないこの祈りは、礼拝堂の閉鎖中にも継続された。

第二次世界大戦に伴う宗教政策の変化によって、礼拝堂は再開されたが、共産主義の建設を目指すフルシチョフの改革に伴い、クセーニヤ崇敬は「反啓蒙」の象徴とみなされ、礼拝堂は再び閉鎖に追い込まれた。第二次大戦後のソヴィエト・ロシアでは、長老として慕われた人々の墓や聖なる泉など、ソ連当局が「いわゆる『聖地』」と呼んだ場所が、組織教会を介さず、人々の崇敬を集めたが、クセーニヤ礼拝堂もソ連当局にはそのような場所とみなされた。一方で、聖職者の大半はクセーニヤ崇敬を教会の伝統と考え重視していたのである。

ソ連時代を通じて、礼拝堂は破壊されることなく存在し続けた。その背景には、1978年にクセーニヤを列聖した在外ロシア教会の影響を指摘することができる。亡命ロシア人やその子弟たちは、「外国人旅行者」としてクセーニヤ礼拝堂をしばしば訪問しており、西側の世論（ソ連における人権問題に対する批判）に無関心ではいられなかった当時のソ連政府に間接的な影響を与えた。

ペレストロイカ後の1988年に祝われたロシア受洗千年祭に際し、クセーニヤは列聖された。クセーニヤが教会によって公式に認められた聖人となり、正教会が国家と協力する組織となった現在もなお、クセーニヤ崇敬は、民衆宗教的性格を保ち続けている。すなわち、伝統的な宗教実践の知識を持たず、教区教会の共同体とは関係を持たない、現代の多くの信者たちにとって、聖者崇敬は敷居の低い宗教実践であり続けている。クセーニヤは、慈愛に満ちた篤信の老女としてイメージされ、たとえ信仰とはかけ離れた生活を送ってきた「罪深い」者の悩みや問題にも耳を傾け、救いの手を差し伸べる存在として、教会のみならず、演劇や音楽などの世俗メディアを通しても表象されているのである。

このように、現代の聖人崇敬という宗教実践は、キリスト教の教義や教会慣例についての理解をほとんど必要とせず、かつ日常的問題の解決に有効であると信じられており、これらの聖人が慈愛に満ちた賢い老女、信仰と

愛にあふれた家族として現代の人々の共感を集めると同時に、古いロシア社会への懐古主義的イメージと結びついていることを明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

Такахаси С., Канонизация и почитание современных святых в поздней и постсоветской России// Церковь, государство и общество в истории России и православных стран: Религия, наука и образование/ под ред. Аринина Е.И. Владимир. 2014. С. 162-170.

(和訳)高橋 沙奈美、「後期スターリン時代およびスターリン後のロシアにおける現代の聖人の列聖と崇敬『ロシアと正教諸国家の歴史における教会、国家、社会』、162-170頁、2014年。(査読無)

Феномен религии и религиозности: концептуализация в академическом философском религиоведении/ под ред. Е.И. Аринина. Владимир. 2015. 担当部分、Раздел 1. Рецепция термина «religio» в культурах мира, Такахаси С. Понятие о религии и религиозных феноменах в Японии, С. 90-107.

(和訳)高橋 沙奈美、「日本における宗教概念」『宗教性と宗教の現象：学術的宗教哲学における概念化』第1巻、90-107頁、2015年。(査読無)

〔学会発表〕(計 8件)

高橋 沙奈美、「救世主としての最後の皇帝ニコライ二世」、プロジェクト研究会「ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究」、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(北海道札幌市)、2016年2月20日。

高橋 沙奈美、「松本佐保著『バチカン近現代史』(第IV-VIII章)へのコメントロシア正教会および東方正教会の立場から」、冷戦研究会第26回例会、東京大学駒場キャンパス(東京都目黒区)、2016年2月13日。

Sanami Takahashi, Rethinking the Legend of Tsar's Family: Nationalist or Religious Veneration?, in the 8th Joint Symposium "Russian Culture: Daily Life and Festivity", Seoul National University, Seoul, Korea, 19 December, 2015.

Такахаси С., Ксения Блаженная в

Ленинграде: Пост-сталинская религиозная политика и народное православие в Советской России, Международная конференция «ПослеСталина. Реформы 1950-х годов в контексте советской и постсоветской истории», Екатеринбург, Россия, 16 октября 2015 г.

(和訳)高橋 沙奈美、「レニングラードの福者クセーニヤ スターリン後のソヴィエト・ロシアにおける宗教政策と民衆的正教」、スターリン以後：ソヴィエト史およびポスト・ソヴィエト史の文脈における1950年代の諸改革、ウラル連邦大学(エカテリンブルグ、ロシア) 2015年10月16日。

Sanami Takahashi, Saints in Soviet Russia: Keeping and Changing the Popular Faith, in the International Joint Workshop “Memories of Socialism and Today: Religion, Politics and Nationalism”, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, Sapporo, Hokkaido, 1 August 2015.

Sanami Takahashi, Traditional and Modern Style of Belief: The Veneration for St. Xenia in Late Socialist and the Post-soviet Russia, the 33rd ISSR Conference “Sensing Religion”, Leuven Catholic University, Louvain-la-Neuve, Belgium, 4 July 2015.

高橋 沙奈美、「ペテルブルグの福者クセーニヤ 反宗教政策とソヴィエト的「民衆宗教」としての「聖人」崇敬」、ソビエト史研究会 2015年度年次研究大会、専修大学(東京都千代田区) 2015年5月13日。

高橋 沙奈美、「聖人崇拜から見るロシアのキリスト教受容の独自性」、ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(北海道札幌市) 2014年11月15日。

〔図書〕(計 1件)

高橋 沙奈美他、「よみがえる宗教 民族的伝統としての正教と正教民族としての記憶」、下斗米伸夫編著『ロシア史を知る50章』、明石書店、2016年出版予定(発行確定)。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 沙奈美 (TAKAHASHI, Sanami)  
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・助教  
研究者番号：50724465